



Title	日本におけるマスジドの増加：茨木マスジド内部の視点から
Author(s)	Abdelrahim, Elhadey
Citation	宗教と社会貢献. 2019, 9(1), p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71677
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文

日本におけるマスジドの増加 —茨木マスジド内部の視点から—

アブドエルラヒム エルハディディ*

The Increase of Mosques in Japan
The View from Inside the Ibaraki Mosque

ABDELRAHIM Elhadedy

論文要旨

本稿の目的は、1990年以降の日本におけるマスジドの増加理由を明らかにするところにある。本稿ではマスジド内部の視点から、その理由を追求した。そのため筆者は、茨木マスジドにおいてインタビュー調査と参与観察を行った。その結果、日本におけるマスジドの増加の背景には、「イスラム・アイデンティティの維持」という要因があることが明らかになった。

キーワード マスジド（モスク）、在日ムスリム、内部の視点、
イスラム・アイデンティティ

The purpose of this study is to identify the reasons behind the increase in the number of mosques in Japan since 1990. This study focuses on the internal point of view, to determine the reason of this increasing. Interview and participant observation were conducted at Ibaraki mosque. The result shows that maintenance of the Islamic Identity is the most powerful factor behind the increasing of mosques in Japan.

Keywords: Mosques (mosques), Muslims in Japan, internal point of view,
Islamic Identity.

* 大阪大学人間科学研究科博士後期課程 abdo4033@gmail.com

1. 問題の所在

1.1 本研究の背景と目的

毎年、さまざまな国からムスリム（イスラム教徒）が来日している。本論文では、日本で在住しているムスリムを「在日ムスリム」と名付ける。在留カード発行時に、本人の宗教の記載が求められないため、日本に滞在しているムスリムの数は明確に知ることはできないが、推測できると考えられる。インドネシア、バングラデシュ、エジプト、サウジアラビアなど、ムスリム人口が全人口の過半数を超えている国の国籍を持つ人々だけに限定すると、2016年においては81,250人が日本に在住している。そして毎日新聞には、日本人ムスリムについて次のようなことが書かれていた。

日本のイスラムコミュニティに詳しい店田廣文早稲田大教授（社会学）によると、日本人ムスリムは1969年に2000人だったが、16年の推計では4万人⁽²⁾に上る。〔毎日新聞 2018.11.19〕

この4万人という数に、上記の外国人イスラム教徒約8万人を加えると、2016年時点における在日ムスリムの全人口は約12万人であると考えられる。1980年代の半ばごろ、在日ムスリム人口は5,000～6,000人であった〔店田2015:2〕が、この30年間で在日ムスリムの人口は約20倍に増加した。この在日ムスリムの急激な増加により、今後日本とムスリムとの関わりが益々重要になると推測できる。

また、人、物、情報が国境を越えて行き来しているグローバル化が進行するにつれて、観光産業が盛んになった。毎年、日本を訪れる外国人が増えつつある。図1からわかるように、日本を訪れる観光客が増えている。世界的な不景気をもたらした2008年のリーマンショックの影響によって2009年には観光客が減り〔沼尻2017:68〕、2011年には東日本大震災の影響で日本を訪れた外国人がおよそ621万人にまで減少したが、2012年には回復した。2013年に来日観光客は初めて1000万人を超え、2016年には2000万人を超えた。このように、日本を訪れる外国人が増えている中で、ムスリムの観光客も増加している。ムスリムの国の中で、特にマレーシアとインドネシアからのムスリムの観光客が最も多いといわれている〔藤田

2017 : 52]。観光客として来日するムスリムと在日ムスリムの増加に対応して、ムスリムの人々がその信仰に関する不便を感じないよう、日本は様々な努力を行っている。ムスリムにとっては、観光中でも欠かせない毎日 5 回の礼拝場所や、ハラール食（イスラム法において食べることが許されている食べ物）の提供態勢などが重要な課題になっている。

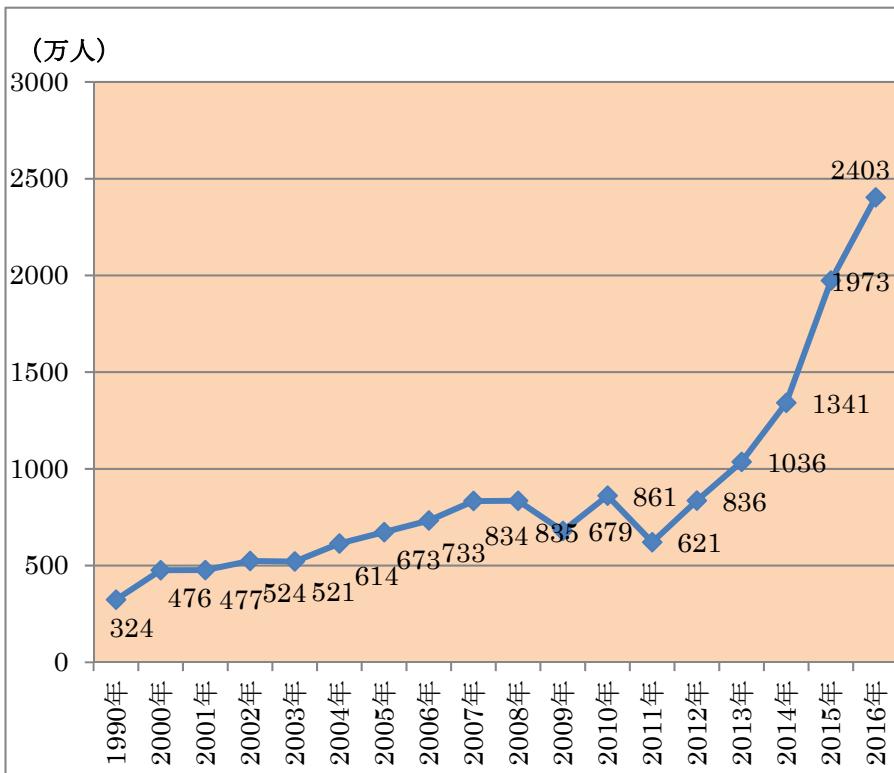


図 1：訪日外客数の推計（単位：万人）日本政府観光局（JNTO）のデータより作成

日本におけるムスリムの人口がえるとともに、ハラールの食べ物を提供するレストランとマスジド⁽¹⁾の増加がそれを反映している。日本におけるマスジドの開堂状況は、1990 年前後で大きな変化がみられた。1990 年までは日本にはマスジドが非常に少なく、増加のスピードも遅かった。1990 年

までに開堂したマスジドはわずか 4 堂であり、その内訳は、神戸には 1 堂（神戸マスジド 1935 年）と、東京には 3 堂（東京ジャーミイ 1938 年、Balai Indonesia 礼拝所 1962 年、アラブイスラミック 1982 年）であった。しかし、1990 年以降の 27 年間において急な増加が見られた。2014 年 7 月の時点で、33 都道府県で 80 堂のマスジドが存在している [店田 2015]。2016 年 2 月の時点では、その数が増え、マスジドやムサッラー（小規模な礼拝場所）は 95 ヶ所に上った [三木 2017]。

このように①留学あるいは仕事のために日本に滞在しているムスリム、②観光客として来日するムスリム、③ムスリムの礼拝する場所として作られたマスジド、これら 3 つの要因の増加はムスリムと日本人の関係に強い影響を与えている。

これらの背景を踏まえて、本研究においては「1990 年以降に日本におけるマスジドが急激に増加した」点に注目し、茨木マスジド内部の視点からその理由を明らかにしたい。

1.2 本研究の対象とする茨木マスジド

本研究の対象は大阪府茨木市にある茨木マスジドである。ここは、「大阪イスラム文化センター」とも言う。最寄り駅はモノレールの豊川駅である。また、茨木マスジドは大阪大学の吹田キャンパスから徒歩で 30 分の距離に位置する。この場所が選ばれた理由は、主には大阪大学に所属するムスリムの留学生と研究員が、物件の購入に取り組んだからである。彼らは OMA (Osaka Muslim Association) をつくり、1990 年の初め、大阪大学の吹田キャンパスで、初めての金曜日の集団礼拝を行い、OMA とムスリムの企業家と関西の日本人と協力し、5 人からなるマスジド委員会を形成した。アワード・シャマ氏とゼバ・クメ氏に加えて、他に 3 人が選ばれた。マスジド委員会の目的は大阪でマスジドを設立するために募金活動をすることである。そのために、ICFO (Islamic Culture Foundation Osaka) の名前で銀行口座を作り寄付活動が始まった。

マスジド委員会は募金活動の状態とマスジドの場所を決めるために、毎月一回、会合をもった。マスジド委員会はもともと大阪市の中心部にマスジドを建てたいと考えていたが、2005 年になっても資金がまだ不足していたため、中心部ではなくてもよいという考えになった。また、「駐車場がな

ければ困る」と言う声もあった。さらに、大阪大学の吹田キャンパスでは、ムスリムが礼拝に使うための部屋が狭く、利用制限がある。例えば、大学の中にあるので、祝日の場合は当然部屋が閉まる。特に、集団礼拝は義務づけられる金曜日に当たると、ムスリムは不自由を感じるであろう。マスジド委員会は、そのために大阪大学から近く、モノレールの豊川駅からも近い物件を買おうとした。2005年12月に、現在の茨木マスジドとなる物件が見つかった。この物件を購入するには320万円が必要であった。しかし、当時、1990年から2005年までに集まった募金額は140万円であった。そこで、MSAJ (Muslim Student Association Japan) に連絡し、日本全国で募金活動をした。2006年3月31日、金曜日の朝に茨木マスジドの現在の物件を買うことができた。また、その募金活動から余った金額で、マスジドの外にお手洗いと水場を建設した。4月22日に、茨木マスジドのイマーム、モフセン・バイユーミ氏のリードで、茨木マスジドにOMAをはじめ、MSAJや多くのマスジドの代表者を招待して開堂式が行われた。また、翌日4月23日に、自治会、警察、近所の人々が招待され、第2の開堂式が行われた。

1.3 茨木マスジドを対象にした理由

この節では、茨木マスジドを調査対象にした理由について論じる。

A. 茨木マスジドを設立したのは大阪に住んでいるムスリムである。国籍に関係なく、様々な国から来たムスリムたちは協力し、寄付活動を行い、マスジドを設立した。ここで、店田によるマスジドの類型についてとりあげたい。店田によると、日本で設立されたマスジドは4つの類型に分類することができる〔店田2015:28〕。

I. 国家による建設型

II-I. コミュニティ型（個人喜捨活用型） II-II. コミュニティ型（個人資産活用型）

III. コミュニティ型+外部資源活用型

IV. 留学生主導型+外部資源活用型

茨木マスジドはIV番目のタイプに入ると考えられる。そのために、特定の国家の政策に影響されることなく、在日ムスリムに共通している普遍的なものを、このマスジドから見出すことができると考えられる。

B. 筆者は2014年に大阪大学の研究生として来日した。そして、大阪大

学の吹田キャンパスに礼拝室があると聞いた。また、そこで会った友人に茨木マスジドを紹介してもらい、ムスリムとして、礼拝のために茨木マスジドに通いはじめた。その結果、茨木マスジドで個人的なネットワークができた。インタビュー調査においてはこのネットワークを利用することができると考えた。

C. 本研究の目的は、「1990 年以降に開堂したマスジドの増加理由を明らかにする」という点にあるので、2006 年に開堂した茨木マスジドは研究対象としては適切だと考えられる。

以上の 3 つの理由により、本研究の調査対象として、茨木マスジドは相応しいと考えた。

2. 先行研究

日本においては、日露戦争後イスラムに関する研究が多く行われ、研究の蓄積がある。しかし、在日ムスリムに関する研究が少ないといった指摘がある〔樋口 2000〕。これらの研究は、以下のように整理することができる。

日本における災害時のムスリムのボランティア活動に注目した研究〔店田 2015〕〔嶺崎 2013〕。在日ムスリムの埋葬状況〔樋口 2005〕。ハラール食品に注目した研究〔沼尻 2017〕〔樋口・丹野 2000〕。日本における外来宗教に注目した研究〔沼尻 2010〕。パキスタン人と日本人の国際結婚〔工藤 2009〕。日本人に対するイスラムのイメージ〔店田 2011〕。マスジドを建設する時の困難に注目した研究〔三木 2017〕〔店田 2015〕。

これらの研究は在日ムスリムが直面している大きな課題についてくわしく論じている。特に、在日ムスリムがマスジド購入・建設の際に様々な困難に直面していることを明らかにした研究は、本論文の観点からは重要である。

まず、マスジドの開堂はムスリム側からも、地域住民の日本人側からも容易なことではない〔三木 2017〕。なぜなら、マスジドの開堂には土地と物件を購入するために膨大な資金が必要となるからである。したがって、ムスリムたちはマスジドを新しく建設するのではなく、物件を購入し、一時的に礼拝ができる場所を準備することがほとんどである〔三木 2017: 27〕。

特に礼拝できる場所の確保はマスジドの建設より優先されている〔三木 2017 : 27〕。また、在日ムスリムの寄付から資金が集まつたとしても、それだけでは問題は解決されない。マスジドの場所も重要である。都市の中心部や主要な駅の近くで礼拝できる場所を確保できればよいが、その場合、土地や物件の値段がなおさら上がる。また、ムスリムが多い地域や大学などからマスジドが遠ければ、礼拝に通うムスリムが少なくなる。そしてさらに、マスジドとして使用できる適切な物件が見つかったとしても、今度は地域住民からの承諾を得る必要がある。三木はイスラムに対する日本人の理解不足はマスジドの開堂を妨げている大きな壁だと指摘している〔三木 2017 : 28〕。同書ではマスジドの開堂に際して、反対運動などのトラブルがおこった三つの事例があげられている。

また、店田〔2015〕は『日本のモスクー滞日ムスリムの社会的活動』で、近年の傾向として、ムスリムはマスジドの建設や購入に際して、地域住民の理解を得た上で建設や購入に取り組むようになっていると述べている〔同書 : 86〕。店田はマスジド建設に対する最初の反対運動として岡山市のケースをあげている。岡山ムスリム学生協会が2004年にマスジドになる予定の物件を購入しようとした際に、地域住民の反対にあった。結局、岡山ムスリム学生協会はその物件の購入をやめ、2008年に岡山大学津島キャンパスの近くの物件を購入した。そして、マスジドにするための改装後、2009年に開堂された。その時、隣人の日本人を開堂式に招待したという〔店田 2015 : 86〕。また、2005年に岡山モスクの建設に対する地域住民の反対の声が出た。店田はこのような反対の原因について「異質な者に対する不安、紛争や宗派間対立などイスラムに対してネガティブ・イメージをいだく地域住民から反対の声があった」と述べている〔店田 2015 : 87〕。

このようにマスジドの開堂は地域社会の反対運動にあうが、ムスリムたちはマスジドの建設或いは購入に熱心である。本研究ではそのムスリムの熱意の根源を追及する。それを明らかにすることによって、1990年以降にマスジドが急激に増加した理由が明らかになると考えられる。

3. 研究方法

本研究では半構造化インタビューの手法を用いた。したがって、質問項目をあらかじめおおよそ決めておくものの、話題の展開に合わせて新たな質問をつけてわえたり、質問の順番にこだわることなく質問したりした。また、茨木マスジドに通うムスリムは多様な国籍を持っている。そして同じ国籍のグループに属する人々同士であれば、話しやすく、様々な課題を論じることができると考えられる。したがって本調査では、ワークショップ形式のインタビュー調査を行った。具体的に言えば、茨木マスジドにはインドネシア・マレーシアグループ、アラブ系グループ、バングラデシュグループがいるが、その各グループの6人程度のメンバーとワークショップ形式のインタビューを行った。イマームを除けば、本研究の対象者のほとんどは大阪大学に所属しているムスリムの学生あるいは働いているムスリムである。

本研究の対象者は日本語が母語の話者ではないので、日本語ではなくアラビア語と英語で調査を行った。そのために、対象者の許可を得た上で、インタビュー調査のメモと録音をとった。

調査後、インタビュー調査で獲得した情報を日本語に翻訳した。そして、参与観察とインタビュー調査によって集めたデータを、グラウンド・セオリー・アプローチを用いて調査の結果と分析を行った。その中で、対象者の主張とエピソードをカテゴリー化していった。そしてカテゴリー間の関係を明らかにし、茨木マスジドのムスリムたちの活動を説明する理論を論じた。

4. 調査結果

4.1 礼拝場所

いうまでもないが、マスジドは礼拝の場所としての機能が最も重要である。茨木マスジドは普通の日本の家屋のような形で2階建ての建物である。イスラムの礼拝においては男性と女性が分かれて礼拝することになってい

るため、男性が一階、女性が二階を利用することになっている。礼拝する前にムスリムはウドゥー⁽³⁾をしなければならないので、男性と女性それぞれのお手洗いとウドゥー用の水場がある。また、マスジドの壁には、メッカの方向に向けて作られたくぼみ（ミフラーブ）がある。これは、イマームが礼拝を主導する時に立つところでもある。マスジド建設の際には、礼拝のために様々な工夫が必要となっていることがわかる。それに関連して、「なぜムスリムは、礼拝のために特定の場所が必要となるのか」という疑問についてエジプト人のAさんはこのように述べている。

A:私たちの礼拝の作法は、他の宗教の信仰者の礼拝とは違います。ある人は座りながら、なにもしなくとも礼拝できます。しかし、私たちは決まっているやり方に従いながら礼拝します。私たちには気持ちが落ち着く静かな場所が必要です。と同時に、他者の邪魔にならないようにしなければなりません。

また、別の視点から見て、ノンムスリムの国である日本に生活しているムスリムの中には、礼拝しているのを見られると日本人に迷惑をかけることになると考える人もいる。つまり、日本人にとっては馴染みがないムスリムの礼拝作法を日本人が目にすると、それだけで迷惑になると考へているムスリムがいる。つまり、来日しているムスリムがマスジドや礼拝室を求めているのは、日本人への気配りでもあるといえる。Cさんはこのように述べている。

C:ムスリムたちは毎日5回の礼拝をしなければなりません。私たちは日本人の邪魔になりたくないです。（中略）、ラボラトリの中で礼拝すると、日本人に迷惑をかけるので、ラボラトリから離れた小さい部屋を与えられたら、そこで礼拝するようにしています。そうしたら、日本人に迷惑をかけません。

4.2 集合場所

イスラムでは集団礼拝が勧められているため、マスジドはムスリムが集合する場所としての機能を果たしている。インドネシア人のMさんとRさんは以下のように話している。

M:マスジドがあれば、ムスリムたちが集まることができます。

R:ムスリムは集団礼拝が義務になっているので、集団礼拝を実施する場所が必要となります。茨木マスジドは日本（大阪）にいるムスリムたちが集合する場所です。

また、マレーシア人のVさんはイスラムには行事が多いので、集合して行事や儀礼を実行する場所が必要だと述べている。

V:金曜日礼拝など、ムスリムとして集まる行事が多いので、集合する場所がとても必要となります。日本においては、ムスリムが集まる場所が見つけにくいことから、マスジドの存在がとても大事だと言えます。

最後に、Jさんはマスジドがムスリム社会を形成するための中心であると述べている。

J:マスジドはイスラム社会のセンターですから。

集合する場所としてのマスジドがなければ、ムスリム社会の形成は不可能だと言える。

4.3 イスラム教育

マスジドには教育機関としての機能がある。この機能を果たすために、茨木マスジドには小さいテーブルが2つと椅子が3つある。1つ目のテーブルは、イマームが説教する時に椅子に座り、資料などをテーブルの上に置くために使う。2つ目のテーブルはイマームが説教をしている時にパソコンで記録する担当者のためにある。他の椅子はクルアーンを暗記する子供たちが、暗記した部分をイマームに言う時に使う。また、マスジドは基本的に絨毯が敷いてあるため、その上で礼拝するが、高齢者や病人がいる場合にはその椅子を使う。

ムスリムはイスラム教育を受けることを希望しており、この希望に応える場所として、マスジドは適切であると言える。

M:茨木マスジドでは毎週イスラムに関する講義があるので、イスラ

ムについて学ぶ場でもあります。

K:このマスジドはお祈りだけではなく、クルアーン⁽⁴⁾とハディース⁽⁵⁾などイスラムの正しい知恵を学ぶためにふさわしい場所です。

「なぜマスジドがふさわしい場所なのか」について、Iさんはマスジドでは自由にイスラムの規則や教えを実行できるからであると述べている。

I:マスジドに定期的に行けば、自分の宗教のルールを実行できるし、自分の宗教についてとても大切な情報を学ぶことができます。

イスラム教育を受けなければならないのは本人に限らない。本人が連れてきた家族も受ける必要があるようである。ノンムスリムの国である日本に家族を連れてきた本人は家族の信仰を守る責任があると感じているようである。Rさんはこのように述べている。

R:私は家族と一緒に来日しているので、彼らの信仰を維持しないといけません。そして、イスラムに関する家族の知識も増やさないといけないと思います。そのために、マスジドはイスラムに関する勉強をする上で、重要な役割を果たしています。さらに、私にとって大学での勉強だけではなく、マスジドでイスラムの知識をも身につけることができています。

日本にはイスラムの学校がないために、ムスリムたちにとってイスラム知識や教育を教えるのはマスジドしかない。

H:ムスリムの国では、幼い頃からクルアーンを学び始めることが一般的です。自分の国から離れるところ（子供にクルアーンを教えること）がとても難しいです。

そのために来日しているムスリムたちは自分の家族、特に子供にイスラム教育を与えたい、と考えている。大人になったムスリムは自分のムスリムの母国で生まれ育ったので、「イスラムのアイデンティティ」と呼んでいいある特徴を身につけているようである。しかし、日本に生まれた、または日本で育てられる過程にいる子供たちにとっては、イスラムのアイデンティティをまだ十分に身につけていないので、イスラム教育を与えること

が不可欠である。バングラデシュ人の K さんは茨木マスジドに子供を連れてきている理由についてこのように述べている。

K:我々には子供がいます。ここにはイマームがいるので、子供たちに基づき知識やクルアーンの章を教えることができます。私たちは子供を教える義務があります。知っているとおり日本はノンムスリムの国です。私たちには宗教的な制限があります。私たちはすべてのことをすることができないし、何でも食べることができない、何でも着ることができないので、制限があります。そのために、私たちの子供を教えないといけません。子供をつれてこのマスジドに来るようになります。それを見た子供たちは、私たちには宗教と宗教的な活動があるとわかるようになります。

特に外国に住んでいてアラビア語がわからないムスリムたちにとって、マスジドへ行って、イスラム教育を受けるのは不可欠なものである。20 年間以上日本に滞在しているバングラデシュ人の F さんは、以下のように述べている。

F:私たちの家族はマスジドに行かなければならぬと思います。アラブ系の人々はアラビア語がわかるので、意味がすぐわかります。アラブ人の奥さんは自分の旦那さんから色々学ぶことができます。しかし、アラブ系ではないムスリムたちはクルアーンを読んでも、言葉の本当の意味がわかりません。読んだものがあなたの心を打たなければ、あなたの(神に対する)崇敬が上がらないと思います。

このように、ノンムスリムの国である日本に家族を連れてきて、自分の家族にイスラム教育を与える方法に悩んでいるムスリムが多い。また、イスラムの聖典クルアーンはアラビア語で書かれている。クルアーンは世界中の多くの言語に翻訳されているが、礼拝する時にアラビア語で唱えるので、アラビア語を知らないければ意味がわからないであろう。

そのため、ムスリムになったアラブ系ではない人種にとって、日本で生活していて家族にイスラム教育を与えることはなおさら困難である。日本ではアラブ系でもアラブ系ではなくても、来日しているムスリムにとって自分と家族がイスラム教育を受けることができる場所はマスジドである

と言える。

4.4 ハラール食品の提供

ハラール食品を入手する場所として、マスジドは有力な選択肢となりうる。なぜなら、日本ではハラール食品を入手することが困難だからである。ムスリムは日本で直面している問題を述べる時に、この課題について詳しく説明する。ハラール食品の入手を容易にするために、茨木マスジドではHFC（ハラールフード委員会）⁽⁶⁾が形成された。HFCのメンバーは全員ボランティアである。この委員会の役割は茨木マスジドのムスリムたちにハラール食品を提供することである。そのために、茨木マスジドではハラール食品を入手することができる。マスジドの台所にはハラール食品を入れるための冷蔵庫が5台置いてある。茨木マスジドの重要性についてインドネシア人のMさんとJさんは次のように述べている。

M: 茨木マスジドではハラール食品を手に入れることができます。

J: マスジドではハラール食品を手に入れたり、礼拝したりできます。

また、アラブ系グループのエジプト人のHさんはマスジドでのハラール提供が重要な役割を果たしていると述べている。

H:（マスジドの機能として重要なのは）ハラール食品の提供です。時間が経つにつれ、日本でハラール食品を提供するところが増えているも、すべての食品を簡単に手に入れることができません。だから、マスジドはムスリムにハラール食品を提供する立派な役割を持っています。

筆者の国であるエジプトとインタビュー対象者の出身国では、マスジドはハラール食品を提供していない。在日ムスリム社会は日本ならではの特異な状況にあるからこそ、マスジドでハラール食品を提供するという日本ならではの特徴が生じたと考えられる。

茨木マスジドでHFCができたのは、ハラール食品に対するムスリムのニーズが背景にある。現在、日本のスーパーでハラール食品が販売されているのを目にすることがある。しかし、数年前にはそのようなことはなかつた。そのために、ムスリムたちはハラール食品を入手しにくかった。東京

にはムスリム人口が多いので、ハラール食品を販売する専用の店ができた。しかし、残りのムスリムの人口はあちこちの地方に点在しているので、東京のように店ができる地方がなかった。神戸では1935年に日本でのはじめてのマスジドができたので、日本ではマスジドがまだ増えていなかった時代には、地方からも神戸マスジドに礼拝しにいくムスリムがいた。そのために、神戸マスジドの近くにハラール食品専用の店がある。しかし、他の地方にはハラール食品を提供する店がなかった。そのために、ムスリムたちは東京にあるハラール食品の会社、あるいはその後インターネットのサイトで注文するようになった。ムスリムたちは当初、個人的な知り合いと一緒に注文をしていた。なぜなら、ハラール食品を販売する会社は、数量が大きい注文ではなければ、受け付けない場合があるからだ。また、宅配便の料金も高いので1人で注文するより複数で注文することが合理的な選択であった。茨木マスジドができて、大阪府特に大阪大学の学生、研究生とその家族にハラール食品を提供する必要が生まれたが、そのためにHFCができたと言えるだろう。在日ムスリムは日本でこのような特別な状況におかれたため、茨木マスジドでハラール食品を提供する仕組みが生まれたのである。この状況とニーズをよく説明したFさんからの語りがある。

F: 東京の店から注文する時に、少なくとも5万円以上の注文をせざるを得ませんでした。私と近所の人と母国の友達2、3人を合わせて、この注文をしていました。宅配便の料金を払わなければなりませんから。1箱の宅配便は約2500円かかります。注文は2箱ですから、私たち学生には宅配便の料金だけで5000円を払わなければならないことがとてもきつかったです。今はアルハムドリアッラー（アッラーに感謝しています）、ハラール食品の店もたくさんできたり、茨木マスジドもできたので、生活しやすくなりました。

このようなハラール食品に対する要求が、茨木マスジドにおけるハラール食品の提供の主な要因であると言える。

4.5 土曜日プログラム

茨木マスジドでは主たる活動として（土曜日プログラム）が実施されている。土曜日に行われていることから、土曜日プログラムと名づけられた。

毎週行われる集団礼拝の金曜日ではなく、土曜日が選ばれたのは、イマームのモフセンによると、多くのムスリムが参加できるよう、日本の休日に合わせているようである。土曜日プログラムは1年中、毎週行われている。しかし行われない時も、1年では2回だけある。その2回は断食明けの祭り（イードエルフィトル）と犠牲祭（イードアドハ）を祝う週である。この週には金曜日の集団礼拝の集まりと、その2つのイスラム的な祭りの集まりがあるので、土曜日プログラムがキャンセルされるわけである。土曜日プログラムについてインドネシア人のMさんはこのように述べている。

M:茨木マスジドにおける土曜日プログラムはとても重要です。

土曜日プログラムは以下のようになっている。

時間	内容
16:00	アスル礼拝（3回目）
16:15～16:45	クルアーン読み方のクラス
16:45～18:15	子供のクラス
18:20	マグリブ礼拝（4回目）
18:30～19:15	予言者ムハンマドの伝記
19:15～20:15	イスラムの法学
20:15～20:30	イシャ礼拝（5回目）
20:45	夕食

表1：茨木マスジドの土曜日プログラムの時間と内容

時間はこのようになっているが、厳しく守っているわけではない。状況の変動によってクルアーン読み方のクラス、子供のクラス、予言者ムハンマドの伝記、イスラム法学の時間を延ばしたり短縮したりすることが多い。しかし、礼拝の時間になると、何よりも礼拝が優先される。

しかし、イスラムのカレンダー（陰暦）の9月にあたるラマダンの月になると、ムスリムは夜明けの前およそ1時間（ファジュル）から日没（マグリブの礼拝）まで断食する義務があるので、土曜日プログラムが多少変化する。ラマダンでは、マグリブの礼拝の時間になってくると、まず断食

していたムスリムは水とジュースを飲み、ナツメヤシの実と果物を軽く食べて、マグリブ礼拝を行う。マグリブ礼拝後、夕食を食べ、予言者ムハンマドの伝記とイスラム法学のクラスが始まる。そして、イシャ礼拝の時間になると、イシャ礼拝を行う。イシャ礼拝後、自宅に帰るムスリムがいるが、ラマダンの一ヶ月だけに行われているタラウィーフ礼拝に参加するムスリムがマスジドに残る。茨木マスジドでのタラウィーフ礼拝に参加するムスリムはおよそ 50 人である。タラウィーフは毎日の 5 回の礼拝のように義務になってはいないが、ラマダンの月に特別に行う礼拝なので、多くのムスリムはタラウィーフ礼拝に参加し、ラマダンを実感するようである。

土曜日プログラムの内容について述べる。

まず、礼拝である。土曜日プログラム中でアスル、マグリブ、イシャ（ラマダン中タラウィーフ）の礼拝が行われる。茨木マスジドの指導者イマームモフセンは礼拝を指導して行う。予言者ムハンマドの教えによると、金曜日の集団礼拝に限らず、普段の毎日の 5 回の礼拝も、集団で礼拝することを勧めている。予言者ムハンマドは「集団礼拝は 1 人だけの礼拝より 27 倍勝る」と言った⁽⁷⁾。

そして、クルアーン読み方のクラスである。クルアーンには「タジウード」という特別な読み方がある。その読み方を学ぶクラスである。礼拝する際に、アラビア語でクルアーンを唱えるので、ある程度アラビア語でクルアーンを読む必要がある。そのために、イマームモフセンの指導によってクルアーンを正しく読むためのクラスが催される。このクラスに参加するのは、ほとんどがアラビア語を母語としないムスリムである。このクラスは、クルアーンの読み方の勉強と同時にアラビア語の勉強にもなっている。

さらに、子供のクラスである。子供のクラスでは、イマームが子供たちにクルアーンを教え、正しく発音するように訂正し、宿題を与える。その宿題は学んだクルアーンの章と節を暗記することである。次の週の土曜日が来ると、イマームの前で子供たちが暗記したものを暗唱する。母国にいる時に、親と学校は子供たちにクルアーンを教えるので、日本では学校の代わりに、マスジドがこの役割を果たしていると言える。

そして、予言者ムハンマドの伝記である。茨木マスジドに限らず、他のマスジドも予言者ムハンマドの伝記を教える。イスラムではクルアーンが

理論的な枠組みのようなものであり、実際の生活にそれを実行したのは予言者ムハンマドである。そのために、予言者ムハンマドの生活はムスリムのロールモデルとして広く教えられているようである。

最後に、イスラムの法学である。ムスリムはイスラムの戒律を常に守るべきことになっている。そのために、ムスリムの国にいる人々よりノンムスリムの国にいる人々のほうがイスラム法学はなおさら必要になる。ムスリムの国にいると牛肉でも鶏肉でもハラールかどうかを気にせず食べることができる。しかし、外国にいるムスリムはイスラムの戒律で決まっているハラールの肉しか食べられないので、ハラールとは何かを学ぶ機会が重要である。食べ物と飲み物だけに限らず、イスラムの戒律の中には人々とのやり取り、断食、礼拝、家族との関わりなどについても教えがあるので、マスジドはイスラムの法学を学ぶ機会を与えていていると言える。

Z:日本に来る前に比べたら今のほうがイスラムに関する知識がより増えました。

ムスリムは、このように土曜日プログラムに参加しイスラムの知識を学ぶことができる。

夕食に関しては、本研究でインタビューを行った茨木マスジドを形成する大きな三つのグループは、順番に料理を作ることになっている。その週を担当しているグループが料理を調理し、皿におき、マスジドに来ている人々に配分する。食べ終わったら、担当しているグループに限らず、他のすべてのムスリムは後片付けを手伝う。

4.6 コンサルテーション

上述したように、ムスリムたちはマスジドを自分の居場所として捉えている。困った時にマスジドへ行き、そこで自分の問題やストレスなどを解消する。友達と話したり礼拝したりすることによって悩み事が解消される場合もあるが、それでも解消しない場合もある。そこでマスジドのイマームとコンサルテーションをする。イマームは、

問題があるときは解決に協力します。私は公表しないが、困った人が相談にくるケースが多いです。

と話している。コンサルテーションを受けたいムスリムは個人的に直接イマームに話すこともあるし、メールで聞くこともある。

インドネシア人の Jさんはコンサルテーションの重要性について語っている。

J:茨木マスジドができる重要なことの一つは、イマームとのコンサルテーションです。私たちはよくわからないことが多いくて、ムスリムにとって日本で生活するのは時々とても大変な事があります。日本に来たばかりのとき、ムスリムとして日本で適切に生活するためにはどうすればいいのかに関してたくさんの質問を抱いています。そのために、マスジドができる最も大事なこととして、コンサルテーションをあげることができます。

このコンサルテーションの内容について、FさんとZさんは以下のとおり述べている。

F:日本での生活の様々な場面においては、ハラール食品について問題が出てきます。私たちムスリムはこのようなことについて詳しくわからないので、知っている人であるイマームに聞きます。

Z:また、日本でムスリムとして生活するにはどうすればいいのかを聞きます。日本はムスリムの国ではないので、たくさんのことを探らなければいけません。また、私たちはイスラム文化とイスラム信仰などを維持しなければいけません。マスジドへ行って、イスラム信仰を守らなければなりません。

このようなタイプのコンサルテーションは（ファトワ）と言う。ムスリムが困った時には、イスラムのシャリア⁽⁸⁾をよく理解しているイスラム学者に質問することができるるのである。質問の内容は、「ノンムスリムの国である日本において、イスラムの教えに沿った生き方ができるのか」といった内容がほとんどである。なぜなら、ムスリムはノンムスリムの国で生活していたとしても、イスラムの教えに従うことが義務付けられているからである。ムスリムの国で生活していると、多数派はムスリムなので、その課題に気を配らない。ムスリムの国で生活しているから、イスラムの教えに沿った生き方をしていると思うようである。しかし、日本に来ると、日本

人の多数派がムスリムではないので、ムスリムとしてどのように日本で生活できるかが重要な問題になる。その問題の答えに困ったムスリムが、茨木マスジドのイマームにファトワを求めているようである。

また、イマームモフセンはコンサルテーションの別の問題について指摘している。それは時々ムスリムの中ではノンムスリムを避けなければならぬと思っている人がいるようである。このように思っているムスリムであっても、日本で生きるために当然日本人とのやり取りがあるはずである。しかし、心の中ではムスリムではない人と関わりを持ちたくないようである。そこで精神的な葛藤に陥る可能性が高い。イマームはこのような状態に陥ったムスリムについて話した。この人は日本社会に適応できないと感じ、だんだん社会から離れたい気持ちに発展した。この人についてイマームは以下のように語っている。

家のドアを閉め、家から出かけようとしました。ムスリムでもノンムスリムでも誰であっても開けようとしました。社会から離れたい気持ちが広がってしまい、誰とも話したくなかったのです。

この人の場合、家から出たくないまでに状況が悪化した。しかし、精神的な葛藤に陥った場合、ムスリムはコンサルテーションを受けにくくとイマームは言った。この精神的な支援はアメリカのマスジドでも確認された[Ann2013]。彼らについてイマームは以下の説明をする。

こういった時の私の役割は（他人との良いやり取りと道徳を持つことによってイスラムの正しいイメージを伝えて、イスラムに招待することが大切である）と説明することです。この答えを得た人はとても気持ちが楽になります。（中略）、このようなムスリムはイスラムの中で正しい答えを見つけると、他人と共生できるようになって、精神的に安定して、社会で積極的になります。

家に引きこもるまでになったそのムスリムはイマームのアドバイスを理解し、現在日本の会社で働いているようである。

以上のことからわかるように、ムスリムが日本社会で共生するためには、日本社会に加えて、ムスリムの側も努力する必要がある。そのためには、もしムスリムが間違った情報を持っていたら、十分な知識を持っているイ

スラム学者にその情報を確認する必要があるだろう。つまり、ムスリムが日本社会で問題なく生活するには、ムスリムの側も努力する必要があるだろう。そのために、イマームはノンムスリムとのやり取りに関するイスラムの正しい教えについて常に説教するようにしていると話した。金曜日の集団礼拝の前のスピーチではムスリムとノンムスリムの関係に関して話すことが多い。

4.7 居場所

マスジドは、セーフスペースとしての機能を果たしていると言えるだろう。たとえば、Cさんはこのように述べている。

C:私たちにとってマスジドはセーフスペースです。ムスリムとしてマスジドへ行って、自分と同じようなムスリムと話します。日本において、このようなことができるマスジドだけです。

セーフスペースとは、学校においてしばしば使われる概念であり、生徒たちが自分の個性を自由に表すことができる場所である [Lynn & Sue2005]。また、セーフスペースは生徒たちに限らず、中流社会から離れたマイノリティ、例えば LGBT のような社会弱者が自由に生きることのできる環境のことも指す [Kerry & Nancy2008]。日本の主流社会とは異なる宗教を持っている在日ムスリムたちにとっては、マスジドがセーフスペースになっていて。そこで自由に自分の信仰に基づいて礼拝したり行動したりできる。また、シリア人 Bさんはセーフスペースと似たような言葉を使っている。Bさんはマスジドを「唯一の避難場所」と表現している。

B:ノンムスリムの国にいる人にとってマスジドがどんな存在なのかを定義します。非ムスリムの国に滞在しているムスリムたちにとって彼らの魂の唯一の避難所です。マスジドは礼拝の家です。アッラーとコミュニケーションをする場所です。

そして、マスジドでは同じ言語と同じ信仰を持つムスリムと会えるので、(私は1人ではない)と感じるようである。エジプト人 Aさんは共通の言語を持つムスリムに会えるので気持ちが落ち着き、マスジドを自分の居場所と感じているようである。

A:マスジドがあることによって、自分が一人じゃないと感じます。特にムスリムとして、他の場所よりマスジドは気持ちが落ち着くような場所だと感じているからです。このように気持ちが落ち着くような場所、または悲しい時に行くような場所、そこで誰かが話を聞いてくれる人がいたり、話してくれる人がいたりする場所です。アドバイスをしてくれる人がいます。このようなことがあれば、心配することはありません。このようなことがあるのはマスジドしかありません。

(中略) どこかで友達と一緒に座っても、マスジドに入るときの（聖なる）気持ちとは違います。

以上から、来日しているムスリムにとってマスジドが居場所としてどの程度の役割を果たしているかを窺える。ところで、日本は治安がいい国として知られているが、それは本研究のインタビューからも確認できる。インタビュー対象者は、「日本は治安がいい」と主張した。しかし、在日ムスリムにとって、求めているのはこの安全だけではなさそうである。言語もわからず、生まれ育った国と違う価値観をもっている日本では、ムスリムたちが社会的及び精神的な安全を求めている。上述したインタビュー対象者の話から、在日ムスリムはこの社会的及び精神的な安全をマスジドに求めていることが窺える。この役割を果たせるのはマスジドであり、これはムスリムたちの心に持っている精神的な力によるものだと考えられる。マスジドは礼拝及び唯一神アッラーの言葉であるクルアーンをよく唱えたり勉強したりする場所であるため、ムスリムはマスジド以外では得ることのできない安らぎを得ることができるようである。

4.8 コミュニケーションと助け合い

日本でのムスリム人口は、全人口に比較すると 0.1% にも満たないマイノリティである。しかも、そういったムスリム達は一人で来日していることが多い。家族を連れて来日したムスリムがいたとしても、その「家族」とは奥さんと子供だけを指している。在日ムスリムは、自分の親しい家族とコミュニケーションを取るだけでは、不足感を感じるようである。しかし、日本人とのコミュニケーションをとるために日本語能力が必須の条件である。本調査でインタビューした 22 人のムスリムの中で、日本語ができる

のは7人のみである。つまり、3分の2以上は日本語ができないのである。従って、日本人とのコミュニケーション不足を補うのはムスリム同士のコミュニケーションである。日本語がわからないエジプト人のCさんは、

(日本語がわからないので) 言語的障害があります。日本人とうまくコミュニケーションができるように、マスジドでは全員が知っている情報は他者に伝え合います。

と話している。このムスリムにとっては日本人とコミュニケーションを取るには英語で会話するしかない。英語はムスリムにとっても、日本人にとっても母語ではないので、英語によるコミュニケーションの難しさが推測できる。また、エジプト人のDさんもマスジドで宗教儀式以外の活動があるので、友達を作る場及び交流の場を与えてくれると述べた。

D:マスジドでは人々と協力したり、友達になったり、知り合ったりします。生活上では食べ物とか飲み物とか、一緒に遊ぶこと、宗教に関わる文化的な面に役立ちます。また、他の国から来たムスリムとの交流もできます。

さらに、シリア人のBさんはイスラムで勧められている集団礼拝の理由を以下のように解釈しているようである。

B:それは、礼拝だけのためではありません。もちろん、礼拝が重要なのは言うまでもないが、人々の心が繋がったり、知り合ったりします。貧困や病気など、誰が何を必要としているかという状況がわかるためです。

また、日本語がわからないインドネシア人のMさんに対して、「新しいところに住み始めた時にどうやってガス会社、電気会社などと連絡したのか」と聞いたところ、Mさんは日本語がわかるインドネシア人のNさんに頼んだと言った。さらに、「無料だし」と笑いながら付け加えた。そして、NさんはMさんと来日したばかりの時のことを以下のように話している。

N:私とMさんは日本に来たばかりの時に、日本語の先生として働いている1人のインドネシア人の先輩がいて、市役所での手続きなどに

色々とでもお世話になりました。

そして、Zさんは車の免許証のためにJさんを連れて行った話をした。

以上の事例からわかるように、日本語ができるムスリムと日本語ができないムスリムの間では利他性が生まれていると言える。日本語がわかるNさんとJさんは「MさんとZさんを手伝わないといけない」という義務がないにもかかわらず、何気なく手を差し伸べている。

このように、日本語を話すことができないムスリムは、マスジドで母国語によるコミュニケーションを求めた。また、助け合う行動も求められた。一人では日本における膨大な情報の中でどれが役に立つかがわからないので、このようなコミュニケーション関係によって助け合うことができたと言える。

それに加えて、イスラムの教えでは助け合うことがよく説かれ勧められている。クルアーンでは「寧ろ正義と篤信のために助けあって、信仰を深めなさい。罪と恨みのために助けあってはならない。アッラーを畏れなさい」⁽⁹⁾とアッラーはムスリムが助け合うように命令している。さらに、予言者ムハンマドは「自分自身を愛するように兄弟を愛すまでは、誰一人信者ということはできない」⁽¹⁰⁾というハディースを残している。

要するに、助け合うことと利他性を促進するイスラムの教え、そして日本ならではの状況におかれたことが相まって、このようにムスリムは繋がり助け合う行動をとったと言える。したがって、このような繋がりあいの実現を生み出す機能をマスジドは持っていると考えられる。

4.9 ムスリムと日本社会の橋渡し

ムスリムの国では、マスジドの機能はムスリムが集まって礼拝することだけにとどまる傾向がある。しかし、日本にあるマスジドはイスラム文化センターとしての役割をも担っているようである。茨木マスジドはムスリムが集まって礼拝する場所だけではない。日本社会にイスラムを紹介する役割を果たしている。

マスジドの機能

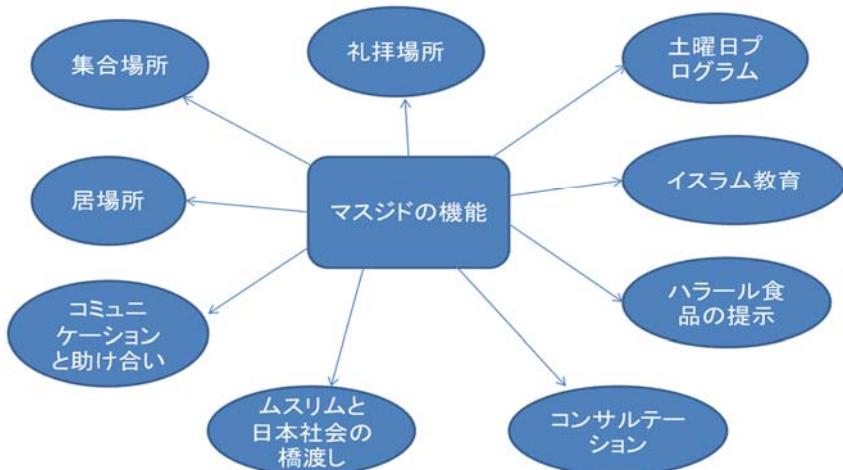


図 2：茨木マスジドの機能・役割

本論文では、このようにインタビューと参与観察によってマスジドの役割・機能を論じた。図 2 が示しているようにマスジドには 9 つの役割・機能があることを確認した。中でも日本におけるマスジドは、日本人とムスリムの橋渡し型機能、ハラール食品提供機能などムスリムの国においても見られないような機能を持っている。日本ならではの状況に置かれているからこそ、マスジドは機能を広げていると考えられる。

5. 在日ムスリムのイスラム・アイデンティティの維持

上述した茨木マスジドの調査から得られたマスジドの機能・役割、特に礼拝場所、土曜日プログラム、イスラム教育、ハラール食品の提供、コンサルテーションといったマスジドの機能から、マスジドが持つ役割としてのイスラム・アイデンティティ⁽¹¹⁾の維持がうかがえる。

まず、礼拝場所としての機能である。イスラムでは毎日 5 回の礼拝が義

務になっている。5回の礼拝はマスジドで行うことが強く勧められている。また、金曜日の集団礼拝については、マスジドで行うことが命令されている⁽¹²⁾。クルアーンの62章のタイトルは合同礼拝（金曜日の集団礼拝）であり、マスジドで金曜日の礼拝を行うことの重要性がうかがえる。このように、外国にいたとしても、マスジドがあることによって、イスラムにおいて重要視されている礼拝ができる。したがって、マスジドの礼拝場所としての機能はイスラム・アイデンティティを維持することが明らかになったと言える。

そして、マスジドは土曜日プログラムとイスラム教育を受ける場としての機能を持っている。茨木マスジドでは土曜日プログラムを通じて、在日ムスリムが必要としているイスラム教育を提供している。大多数の人口がムスリムになっている国から来日したムスリムは、自分の国で当たり前のようにしていた行動が、日本においてはできなくなる。それは崇拜においても日常生活においても大きな変化であり、来日したムスリムはそれに驚くようである。その新しい生活においては、ムスリムとしてどのように生活すればいいのか、という点が重要な疑問点となる。そこで、彼らはマスジドでイスラム教育を受けることによって、この疑問の答えを見つけることができる。また、来日したムスリム本人に限らず、その人の家族のイスラム的教育も必要とされる。家族を連れて来日したムスリムたちは、自分の家族の信仰の強化に対する責任を感じている。特に、母国では子供たちに幼い頃から、クルアーンやハディースなどといったイスラム教育を与えられるが、来日後、それができなくなるので、マスジドが子供たちにイスラム教育を与える場となる。このように、マスジドは大人にも子供にもイスラム教育を与えることによって、イスラムにおける信仰、崇拜、許されるものと禁じられているものなどを勉強することができる。これらのことを行ふことによって、イスラム・アイデンティティが維持される。したがって、マスジドは土曜日プログラムやイスラム教育を受ける場として機能し、それがイスラム・アイデンティティを維持していると言える。

さらに、マスジドはハラール食品を提供する場としての機能を持っている。イスラムにおいてはハラール食品しか食べることができない。ハラール食品を提供する場所がなければ、在日ムスリムは日常生活における当然の行為である「食事をとること」に不自由を感じるだろう。特に問題となり

うるのが、「食べて良いもの」にアルコール、日本酒、豚エキスなどといった「食べては、飲んではいけないもの」が混ざることによって、「食べてはいけないもの」になるという点である。その結果、ムスリムが食べることのできるものが非常に限られたものとなる。このような状況になると、ムスリムたちは不満を感じかねない。この問題を根本的に解決するために、茨木マスジドはハラール食品の提供を行っている。これは、在日ムスリムが不自由を感じないようにするためである。このようにマスジドは、イスラムの法にのっとったハラール食品を提供することによって、イスラムの法律を守ろうとするムスリムの生活を楽にしている。それは在日ムスリムのイスラム・アイデンティティを維持するためにかなり貢献していると言える。

最後に、コンサルテーションを受ける場所としてのマスジドの機能に注目したい。上述したとおり、在日ムスリムは、大多数がムスリムになっている母国から、ムスリムがマイノリティになっている日本で生活するようになった。そこでノンムスリムの国においてどのように振る舞えば、ムスリムとして生活できるのかが大きな課題である。その問題を抱えて精神的に悩むムスリムが存在する。この根本的な疑問の答えを、マスジドのイマームに求めるムスリムが多い。インタビューによって得られた彼らの疑問からわかるように、ムスリムはイスラム・アイデンティティを持ったままで、日本での生活を希望していることがわかる。マスジドは、このようなコンサルテーションを受ける場所として、在日ムスリムのイスラム・アイデンティティを維持するのに貢献していることがわかる。

マスジド機能によるイスラムアイデンティティの維持

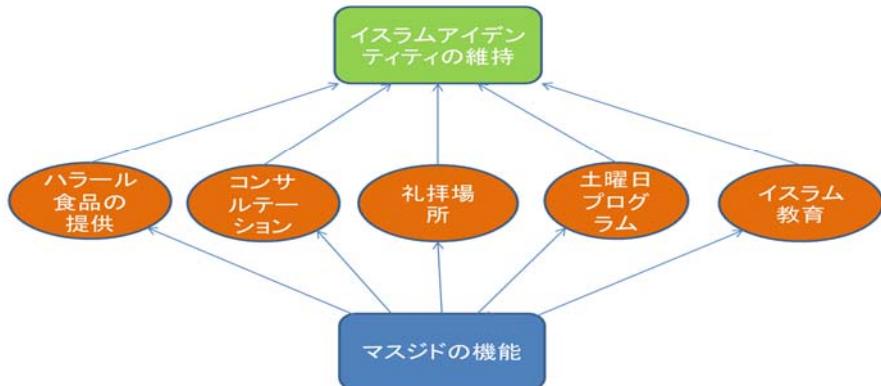


図3：マスジド機能によるイスラム・アイデンティティの維持

以上のことから図3にあるように、礼拝場所、土曜日プログラム、イスラム教育、ハラール食品の提供、コンサルテーションとしての機能によって、マスジドは、在日ムスリムのイスラム・アイデンティティを維持していることが明らかになった。

6. まとめと今後の課題

本論文では、日本全国で1990年以降に急激にマスジドが増加した理由を論じてきた。すでに先行研究からわかるように、日本ではマスジドの購入・建設などが簡単なものではないことが明らかになっている。地域社会の反対の声に合う事例もある。このような状況にもかかわらず、日本におけるマスジドが増加しつつある。本研究で扱った調査の大部分は在日ムスリムコミュニティの内的な要因を基礎とするデータである。しかしこれに対し、外部からの要因を想定することもできるだろう。例えば、「マスジドの増加はムスリムが増加した結果である」という解釈がある。この解釈を完全に否定することは困難である。なぜならば、在日ムスリムの増加がマスジドの増加に多少の影響を持っていることを推定することができるからである。

しかし、在日ムスリムの増加が、マスジドの自然な増加に常につながるとは言えない。したがって、外部からののみの視点だと、なぜ日本におけるマスジドが増加したのか、また、なぜ在日ムスリムにとってマスジドが重要なのかが不明瞭なままである。それを踏まえた上で、本論文では茨木マスジドで行った内部からの調査を通して、マスジドの増加の理由を求めた。

次に、調査結果を述べる。マスジドは在日ムスリムに義務としての礼拝ができる場所を提供している。しかし、それはマスジドの機能を探るまでの出発点である。マスジドは礼拝を通して、在日ムスリムの精神的要求を満たすと同時に、在日ムスリムが集まる場所を提供している。マスジドで礼拝することをきっかけとして、集まった在日ムスリムは、ムスリムとして日本でよりよい生活をするためにマスジドに様々な機能を求めるようになる。この機能の一例として、マスジドは、在日ムスリム本人とその家族のイスラム・アイデンティティを維持したいという要求を満たしていることが明確になった。また、マスジドは在日ムスリムの実生活における問題や課題の解決を行っている。在日ムスリムにとっては、マスジドの存在が不可欠と言っても過言ではない。したがって、在日ムスリムはマスジドの建設や購入に際して多くの困難があっても熱心に取り組んでいるのである。それが、マスジド増加の最も重要な要因だと考えられる。

マスジド増加によって在日ムスリムと日本社会の関わりがますます増えていくと思われる。そして、それが今までなかった接触の機会を双方に与えている。筆者は、日本とイスラムの間には共通の価値観があると考える。例えば、忍耐力を尊重すること、肌の露出を嫌うこと、「情けは人のためならず」や「おもてなし」という考え方、そういう価値観はイスラムにも美德として存在している。しかし、相違点もたくさんあるのは事実である。

それゆえに、在日ムスリムと日本社会はどのように関わり、その影響がどのようなものになるのかが、大きな課題として残っていると思われる。

謝辞

情報提供とインタビュー調査にご協力をいただいた茨木マスジドの皆様に心から感謝を申し上げたい。また、査読者の方がたからの貴重なコメントをいただき、より内容を充実させることができたことに感謝を申し上げたい。

註

- (1) マスジドはアラビア語の言葉であり、イスラムの礼拝所モスクを指す。サジャダ（ひれ伏す）という動詞から派生した。
- (2) 日本国籍のムスリムの内訳は、結婚で改宗した人が1万2千人、第2世代（子供／若者）が2万3千人、日本国籍を取得した外国出身者とその家族が3000人、自ら改宗した人とその家族が2000人になっている。
- (3) 礼拝する前の準備。体を水で淨めること。
- (4) イスラムの聖典である。
- (5) 予言者ムハンマドの言行の記録である。
- (6) Halal Food Committee を言う。
- (7) <https://sunnah.com/riyadussaliheen/9/74>[Al-Bukhari and Muslim]. Sunnah.com Book9, Hadith74。
- (8) イスラム法のことをさすアラビア語の言葉である。
- (9) クルアーン食卓章2節、三田了一訳『聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982年、全1巻。
- (10) https://sunnah.com/nawawi40_40_Hadith_Nawawi_13_40 のハディース、イマーム アンナワウイー編黒田壽郎訳。
- (11) ここでいうイスラム・アイデンティティはイスラムの教えに基づいた生き方を指している。
- (12) あなたがた信仰する者よ、合同礼拝の日の礼拝の呼びかけが唱えられたならば、アッラーを念じるに急ぎ、商売から離れなさい。もしあなたがたが分っているならば、それがあなたがたのために最も善い。（クルアーン62章、9節）

参考文献

- 稻場圭信 2011『利他主義と宗教』弘文堂。
- 岸田由美 2011「ムスリム留学生の宗教的ニーズへの対応：現状と課題」留学生交流・指導研究、13。
- 工藤正子 2009「関東郊外からムスリムとしての居場所を築くパキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から」文化人類学74/1。
- Putnam,R.2000. Bowling Alone: The Collapse and Revival of AmericanCommunity (=柴内康文訳 2006『孤独なボーリング』柏書房。)
- 高尾賢一郎 2011「ムスリム社会における社会貢献:現代シリアのアブー・ヌールの事例」宗教と社会貢献1巻2号。
- 谷富夫・芦田徹郎 2009『よくわかる質的社調査技法編』ミネルヴァ書房。
- 店田廣文 2006「在日ムスリム調査－関東大都市圏調査第一次報告書－」早稲田大学人間科学学術院、アジア社会論研究室。
- 店田廣文・岡井宏文 2011「外国人に関する意識調査岐阜市報告書」早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室。

- 店田廣文 2015 『日本のモスクー在日ムスリム社会的活動』 山川出版社。
- 沼尻正之 2010 「越境する世界宗教—グローバル化時代の神々のゆくえー」、追手門学院大学社会学部紀要 第4号。
- 沼尻正之 2017 「現代日本における「ハラール」をめぐる諸問題」 三木英編『異教のニューカマーたち—日本における移民と宗教』 森話社。
- 橋爪大三郎 2006 『世界がわかる宗教社会学入門』 ちくま文庫。
- 樋口直人・丹野清人 2000 「食文化の越境とハラール食品産業の形成:在日ムスリム移民を事例として」 徳島大学社会科学研究 13。
- 藤田智博 2017 「イスラム圏からの観光とハラール」 三木英編『異教のニューカマーたち—日本における移民と宗教』 森話社。
- 星野英紀・山中弘・岡本亮輔 2012 『聖地巡礼ツーリズム』 弘文堂。
- 三木英 2012 「宗教的ニューカマーと地域社会—外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか—」 宗教研究 85巻4輯。
- 三木英 2017 「マスジドと地域社会」『異教のニューカマーたち—日本における移民と宗教』 森話社。
- 嶺崎寛子 2013 「東日本大震災支援にみる異文化交流・慈善・共生—イスラム系 NGO ヒューマニティ・ファーストと被災者たち—」 宗教と社会貢献 Vol3,Issue1。
- 三田了一訳 1982 『聖クルアーン』 全1巻、日本ムスリム協会。
- 山中弘編 2012 『宗教とツーリズム』 世界思想社。
- Ann W. Nguyen, Robert Joseph Taylor, Linda M. Chatters, Aaron Ahuvia, Elif Izberk-Bilgin, Fiona Lee 2013, Mosque – based emotional support among young muslim Americans. *Review of Religious Research*, 55(4).
- Lynn C. Holley & Sue Steiner 2005, SAFE SPACE: student perspectives on classroom environment, *Journal of Social Work Education* Vol. 41, No. 1.
- Kerry John Poynter & Nancy Jean Tubbs 2008 ,Creating LGBT safe Space Ally Programs, *Journal of LGBT Youth*.
- Hasan Yahia Gaber Damry 2006. The contributions of the Masjid to face the intellectual and moral deviations from the perspective of Islamic upbringing, Umm Al-Qura University.
- Mohamed Hoseen Alzahaby 1976. The massage of the Masjid in the world through history, *Journal of Islamic research* Vol.2(2).